やまだの歴史人物誌 38

このコーナーでは、町にゆかりのある歴史人物とその結び付きなどをシリーズで紹介しています。執筆者は町史編さん委員の佐藤仁志さん（豊間根・六八）です。

大津波後の町の復興に命を賭けた 桐ケ窪信五郎

桐ケ窪信五郎は安政四（一八五七）年、宮城県宮城郡蒲生（かもう）村に生まれた。明治十年頃、警察官として山田に赴任した。その頃、山田に阿部和作塾があり、彼は塾で新しい思想を学んだ。

明治二十二年町村制が施行され、信五郎は三十二歳の若さで大沢村長に就任した。彼は役場庁舎の新築、村政の基盤づくりに努め、特に財政面にその能力と手腕を発揮した。しかし、体調を崩し同二十四年退任。その後同二十八年山田町議会議員に当選した。

明治二十九年六月十五日午後八時三十分頃、かつてない大津波が湾岸を襲った。大沢村四百十六人、山田町八百四十人、織笠村七十二人、船越村で千三百二十七人が死亡、家屋、船舶、漁業施設などに壊滅的な被害を受けた。

初代大沢村長
桐ケ窪信五郎

県知事から桐ケ窪信五郎大沢村長への当選の認可書

津波襲来前の五月二十六日、山田町長中野健次郎が退任し、助役貫洞勉（かつ）也が町長代理を務めた。六月十一日には収入役東海林傳六が退任し、同日阿部照二が収入役に就任した。

六月十五日、町長代理貫洞勉也は津波により死亡、収入役就任間もない阿部照二も津波で死亡。緊急事態時に町三役が空席という非常事態となった。六日後の二十一日武藤六右エ門が臨時町長代理に就任、十一月二十日佐藤菊治が収入役に、十二月七日信五郎が助役に就任、全力復旧に努めた。

翌三十年三月、木下善次郎が町長に就任、助役信五郎、収入役菊治は新町長の下、津波後の復旧、財政の立て直しに尽力した。三十二年十二月信五郎は推されて四十二歳で山田町長に就任、助役郡司幸次郎、収入役佐藤菊治の三役は災害後の復興、産業経済の基盤構築に尽力された。

この頃、漁業権の問題が起こり、信五郎は推されて飯岡浦住民漁業会委員長（山田町住民漁業会委員長）に就任。重茂地先漁場の漁業権設定の件で激務の中、再三盛岡、仙台地裁に足を運び主張を訴え続けた。明治三十五年飯岡浦漁業組合が設立、三十六年重茂との共同入会漁業権を取得した。飯岡浦では彼を漁民の父と讃えた。

信五郎は町長退任三ケ月後の明治三十五年四月、波瀾万丈の四十五歳の短い生涯を終えた。

町長室から

五月十八日、山田猟友会（佐々木實行会長）と豊間根猟友会（川村敬一会長）主催の射撃大会が開催されました。毎年ご案内をいただきながら都合がつかず、今年が初めての出席となりました。国道を北上し、豊間根の繋橋を渡って津軽石方面に向かった所に射撃場があります。ちょうど田植えの時期と重なり、大会参加者は二十人足らずで例年より少ないとのことでした。立った競技者の左右から色々な角度で発射される標的を狙って引き金を引きます。予測できない標的の動きに対応するには極度の緊張感が求められそうですが、命中して標的が砕け散った時はさぞやそう快だろうと思いました。猟友会の皆さまには、野犬やカラスなどの有害鳥獣駆除や熊が人家の近くに出没した時には時間を問わず出動をお願いするなど、多くの貢献をいただいております。今年もよろしくとお願いしてきました。

山田町長　沼崎喜一